

知識と鑑賞方略が抽象画の評価に及ぼす影響

The Effects of Prior Knowledge and Appreciation Strategy on the Evaluation of Abstract Paintings

木下 雄斗[†], 島田英昭[†]
Yuto Kinoshita, Hideaki Shimada

[†]信州大学
Shinshu University
17ea103f@shinshu-u.ac.jp, hshimada@shinshu-u.ac.jp

Abstract

People who aren't familiar with paintings tend to avoid viewing abstract paintings. This study examined the effects of prior knowledge, appreciation strategy, and interaction between them on the evaluation of abstract paintings among painting novices. Forty-five university students evaluated an abstract painting on four questionnaire items after looking at the painting for a minute: comfortableness, uncomfotableness, frustration, and incomprehensibility. In addition, after looking at the same painting for three minutes, they responded to the same items again. Some participants read an explanation of the painting before viewing it, that is, they acquired prior knowledge. In the same way, before they looked at the painting, other participants were instructed to think of the meanings of the painting creatively while viewing it, which means that they were required to use a divergent appreciation strategy. As a result, comfortableness was enhanced, while uncomfotableness, frustration and incomprehensibility were reduced in the group of participants with both prior knowledge and the divergent appreciation strategy although the divergent appreciation strategy without prior knowledge increased frustration. The results suggest that the divergent appreciation strategy with appropriate knowledge enhanced positive appreciation of abstract paintings.

Keywords — art, abstract paintings, emotion, strategy

1. 問題と目的

絵画の初心者には抽象画をはじめとした現代芸術を「解らない」といってこれを敬遠している^[1]。こうした反応の原因の一つは、知識の有無にあると考えられる。Schmidt 他は、一般的な絵画を対象として、熟達者と初心者の絵画鑑賞時の違いをプロトコル分析により検討している^[2]。その結果、知識を備えた熟達者は多様な観点から鑑賞を行っていることが示された。これは、知識の抽象画評価への影響を示唆している。

では、知識さえあれば抽象画評価は肯定的になるのだろうか。本研究は、知識の活用方略、すなわち鑑賞方略も考慮する必要があると考える。

上述の研究では、初心者が鑑賞の初期に絵画の意味的内容（作者の意図）に着目する鑑賞方略（以下「収束

的鑑賞」）を持つことも示された。これは初心者が絵画の意味的内容に固執する認知的制約（以下「意図理解制約」）を持っていると言い換えられる。一方、Barthes が指摘するように、芸術作品の解釈については、鑑賞者が作者の意図を受容するのではなく、創造的な解釈を行う鑑賞方略がある^[3]。この鑑賞方略を以下「拡散的鑑賞」と呼ぶ。鑑賞過程における拡散的鑑賞を制約緩和パラダイム^[4]から捉えれば、抽象画の鑑賞方略を収束的鑑賞から拡散的鑑賞に変更することにより、抽象画の多様な解釈に気づき、結果的に肯定的な抽象画評価につながると予想される。実際、Arenas は、「(中略) 美術作品を目でみて、頭で考えるという習慣がつけば、だれでも美術のおもしろさに気づくということに疑いをもちほしないだろう」と述べている^[5]。

ただし、拡散的鑑賞方略が肯定的な抽象画評価を促す前提として、作品に対する十分な知識が必要となるだろう。なぜなら、拡散的鑑賞による多様な解釈への気づきは、その多様性に耐えられる十分な知識に支えられていると考えられるからである。

以上から、初心者の肯定的な抽象画評価を促進するには、知識と拡散的鑑賞方略の両方が必要ではないかと考えられる。そこで本研究は、知識の有無と鑑賞方略を操作し、初心者の抽象画評価を実験的に調べる。特に、知識と拡散的鑑賞の両者が揃うことが、肯定的な抽象画評価につながることを示す。

2. 方法

実験参加者 絵画初心者の大学生および大学院生 46 人（男性 8 名、女性 38 名、 $M=21.35$, $SD=1.40$ ）から協力を得た。絵画初心者の抽出は、①「今回の実験で使用した絵画の中に過去に鑑賞したものが有るか否か」、②「年間あたりの美術館に行く回数」、③「学校教育外での美術教育の経験の有無」の 3 つの基準に拠っていた。これらは実験後のアンケート紙上で尋ねた。③については「ある」と回答した実験参加者についてはそ

の内容についてインタビューを行った。

①については過去に鑑賞したものと回答した参加者はいなかった。②については、0~3回であった。③では46人中5人が学校教育外での美術教育の経験が「ある」と回答した。その内容を尋ねたところ、この内3人は造形教室およびワークショップの経験を挙げ、1人は美術館で学芸員に絵画の解説を受けた経験を、1人は高校時代の美術部所属と、造形教室の経験を挙げた。この中で美術部所属経験のあると回答した参加者は、他の参加者に比べると絵画技法や美術史に関して専門的な知識を有していると考えられたため、この参加者のデータは用いないこととした。他の4人についてはそれぞれの教育機会に絵画技法や構図を含む専門的な知識を教わったことはないと回答したため、これらの参加者は絵画初心者とみなした。

実験計画 知識提供(2;あり、なし)×拡散的鑑賞教示(2;あり、なし)×評価時期(2;事前、事後)の3要因計画とした。

材料 鑑賞材料として、Willem de Kooningの「発掘」(1950)と「復活祭の月曜日」(1956)を用いた。これらはいずれもHarry F. Gaugh(1989)(桑原・齋藤訳)の「Willem de Kooning」という本に載っているものを、直接使用した。「発掘」は縦26.4cm、32.8cm(実物は縦203.5cm、横254.3cm)であり、「復活祭の月曜日」は縦26.1cm、横19.8cm(実物は縦243.8cm、横188cm)であった。

前者は黒で縁取られた黄色の複雑な形の塊が全体的に広がっており、その中に鳥の形や魚の形、目、口のような形などの様々なものが描かれている。後者は青、緑、黄色、白などの様々な色で描かれた線やスペースが不規則かつ複雑に重なり合っており、また一部に新聞が転写されているところが見える。両者に共通する特徴としては、一見して何が描かれているのか分かりにくい、不規則で複雑なタッチで描かれている、という点が挙げられる。

いずれの絵画も呈示する際は、絵画の色彩のついた部分と余白以外の部分は題名も含め、紙で目隠しをして参加者の目につかないように留意した。また、本の外装にも紙で目隠しを施しており、参加者は絵画部分以外の本の内容が分からないようになっていた。なお、作品の選出は一見して何が描かれているのか分かりにくいことと、過度に有名でないことの2つの基準に沿って筆者が独自に行った。

絵画以外には、各作品に関する知識提供のための解

説文1つずつと、拡散的鑑賞を促す方略教示文を用意した。

解説文には絵画の題名、その絵画が描かれた過程や背景、描かれているもの、特徴、絵画が与える印象といった要素が記述されていた。解説文はHarry F. Gaugh(1989)(桑原・齋藤訳)の「Willem de Kooning」の中から、当該作品について解説した文章の一部を抜き出して組み合わせつつ、適宜加筆を行い作成した。「発掘」の解説文は754文字、「復活祭の月曜日」の解説文は727文字であった。参加者がこれらを読み終わるのに要した時間はおよそ1分前後であった。

一方、方略教示文の内容は参加者が絵画を見る際に、①自分なりの絵画の解釈(絵画が意図していると思われるもの)、②①で想像したことを踏まえると、絵画についてどのようなことを感じるか、の2点を意識して鑑賞するように求める、というものであった。方略教示文には以上の2点に関する補足として、①については1つだけでなく複数想像可能であるということ、作者の意図を正確に読み取る必要はなく、気楽に思いのまま想像して良いということ、想像したことについて実験参加者が尋ねたり記述させたりすることはない、ということの3点も併せて記述した。文字数は284文字であり、参加者が読み終わるのにはおよそ10秒から30秒程度かかった。

また、評価項目として「どの程度～を感じましたか」の形式で「心地よさ」、「フラストレーション」、「不快さ」、「不可解さ」の4項目(「1.全く感じなかった」~「5.強く感じた」の5件法)を準備した。以上の項目はそれぞれ「心地よさ」において絵画の肯定的評価を、「フラストレーション」においてSchmidt他²⁾で初心者の「抽象画」への反応として表れた「フラストレーション」の傾向を、「不快さ」において絵画への否定的評価を、「不可解さ」において意図理解制約の確認を目的としている。

手続き 実験は前半と後半の2セッションに分けられていた。前半・後半共に1分間の事前鑑賞フェーズと3分間の事後鑑賞フェーズがあり、事前・事後の各フェーズ後に抽象画を評価した。ただし、後半では事前鑑賞フェーズと事後鑑賞フェーズの間に介入フェーズが存在した。介入フェーズでは、15人の参加者が解説文を読んだ。以下、この群を知識群とする。また他の15人は方略教示文を読んだ。この群を以下解釈群とする。また別の15人は解説文と方略教示文の両方を読んだ。以下この群を知識・解釈群とする。

前半と後半で見る作品は1参加者ごとに入れ替え、カウンターバランスを取った。また、各条件と前半・後半で見る作品の組み合わせは、各群でその組み合わせがほぼ同数になるようにした。その結果、知識群と知識・解釈群では前半で「復活祭の月曜日」（後半で「発掘」）を鑑賞した人数が8人、逆の組み合わせが7人であった。解釈群では前半で「復活祭の月曜日」（後半で「発掘」）を鑑賞した人数が7人、逆の組み合わせが8人であった。

具体的な流れは以下の通りであった。前半では全ての参加者に対して同じ手続きを適用し、統制条件とした。最初に参加者は実験同意についての説明を受け、署名を受けた。その後、実験にかかる時間、そして実験が前半と後半に分かれており、前後半でそれぞれ別の作品を1作品ずつ鑑賞することと、前半の課題の流れ、の3点について説明を受けた。以上を説明後、参加者に課題についての疑問がないことを確認した。また、鑑賞前には絵画を見やすくするために本の位置は動かしてもいいが、向きは変えないでほしい、ということをお口頭で補足した。

絵画の呈示は実験者が本をページの閉じられた状態で参加者の前に出し、鑑賞開始の合図とともに「発掘」および「復活祭の月曜日」の載せられているページを開く、という形で行った¹。前半の課題として、参加者は「発掘」か「復活祭の月曜日」のどちらかについて事前鑑賞を行った。鑑賞時間が終了すると実験者が本を閉じた。事前鑑賞の後、参加者は鑑賞した絵画について質問紙に各項目について評定を行った。質問紙は次の鑑賞に移る前に実験者が回収した。その後、同じ作品について3分間の事後鑑賞と評定を行った。

前半の課題が終わると、参加者は後半の課題の流れについて説明を受けた。この時点で、知識群、解釈群、知識・解釈群にはそれぞれ異なる課題の流れを説明した。説明終了後、参加者に課題についての疑問が無いことを確認してから、後半のセッションに移行した。後半の事前鑑賞では、参加者は前半鑑賞したものと違う作品について事前鑑賞と評定を行った。事前鑑賞フェーズが終わると、介入フェーズに移行した。このフェーズで各参加者は解説文または方略教示文、あるいはその両方を読むことを求められた。読み始める前には、読み

飛ばしの無いように読むようにしてほしい、ということをお口頭で補足した。文章を読むのに制限時間は設けなかった。

参加者が文章を読み終わったことを確認した後、事後鑑賞フェーズに移った。鑑賞前には、参加者には読んだ文章を読み返しながらかみ鑑賞してもかまわないが、なるべく絵の方を見るようにしてほしい、ということと、先ほど読んだ文章を意識しながら鑑賞してほしいということをお口頭で伝えた。その後鑑賞と評定を行った。

なお、知識・解釈群は先に解説文を読んでから1分間の鑑賞を行い、その後方略教示文を読み、さらに2分間の鑑賞を行った。そしてこの2回の鑑賞の終了後に質問紙へ回答した。このような手続きを踏んだのは、両方の文章を読んでからまとめて事後鑑賞を行うより、それぞれの文章を読んでからの事後鑑賞を1回ずつ行ったほうが、それぞれの文章を読んだ後の鑑賞に対する感想を自覚しやすいと考えたからである。また、1分間と2分間の不均等な時間配分を行ったのは、解説文読後の鑑賞より、方略教示文を読後の拡散的鑑賞のほうが絵画について考えることが多く、鑑賞に必要な時間が多くなると考えられたからである。

また、知識・解釈群のいずれの事後鑑賞でも、文章を読み返しながらかみ鑑賞してもかまわないが、なるべく絵の方を見るようにしてほしい、ということをお口頭で伝えた。事後鑑賞中に文章を読み返すという行為についてであるが、全ての群で多くの参加者はこれを行わず、また一部の参加者が数秒文章を見返すことはあったが、大半の時間は絵画に目が向けられていた。

実験終了後、各参加者はアンケートに回答し、その後お礼を受け取って帰った。

3. 結果

知識群、解釈群、知識・解釈群について、事前鑑賞から事後鑑賞にかけての変化を比較するため、参加者内t検定と参加者内分散分析を行った。なお、分散分析で各群との比較に用いたのは、各群の前半のデータである。また、統制群についてはt検定のみを行った。統制群は全参加者の前半データに当たる。結果は項目ごとに表1にまとめた。

分析の結果、知識群では、心地よさの増加、不快さと

¹ なお、提示する際に「復活祭の月曜日」を本来の縦と横の向きを異なって提示してしまうというミスが全参加者に対して生じた。ただし「復活祭の月曜日」も含め、今回の実験で使用した絵画は先述した様に、元々一見して何が描かれてい

るかを特定するのが困難である上に、実験後のアンケート及びインタビューにおいて、それぞれの絵画の向きについて違和感を抱いた参加者は存在しなかったため、このミスがデータに与える影響はないと考えられる。

表1 各群の事前・事後鑑賞の評定平均値(SD)、事前・事後の変化のt検定結果、知識群、解釈群、知識・解釈群の各群における統制条件との事前・事後変化の交互作用の有無

		心地よさ				フラストレーション					
		事前	事後	ρ	d	事前	事後	ρ	d		
知識群	t検定	1.9(1.0)	2.7(1.0)	$\rho < .05$	0.7	知識群	t検定	1.9(0.6)	1.8(0.8)	$\rho = .75$	-0.6
	交互作用			$\rho < .05$		知識群	交互作用			$\rho = .81$	
解釈群	t検定	2.5(1.4)	2.5(1.2)	$\rho = .72$	0.1	解釈群	t検定	1.7(0.7)	2.3(1.2)	$\rho < .05$	0.6
	交互作用			$\rho = .13$		解釈群	交互作用			$\rho = .18$	
知識・解釈群	t検定	2.2(1.1)	2.8(1.0)	$\rho < .10$	1.2	知識・解釈群	t検定	2.3(1.1)	1.8(0.9)	$\rho < .05$	-0.6
	交互作用			$\rho < .10$		知識・解釈群	交互作用			$\rho < .05$	
統制群	t検定	2.0(0.8)	2.2(0.8)	$\rho = .36$	0.1	統制群	t検定	1.9(0.9)	2.1(1.2)	$\rho = .47$	0.1

		不快さ				不可解さ					
		事前	事後	ρ	d	事前	事後	ρ	d		
知識群	t検定	2.6(1.4)	2.0(0.6)	$\rho < .10$	-0.5	知識群	t検定	3.8(0.9)	3.0(1.3)	$\rho < .05$	-0.6
	交互作用			$\rho = .65$		知識群	交互作用			$\rho = .22$	
解釈群	t検定	2.5(1.4)	2.4(1.2)	$\rho = .80$	-0.1	解釈群	t検定	3.1(1.2)	3.3(1.3)	$\rho = .58$	0.1
	交互作用			$\rho = .40$		解釈群	交互作用			$\rho = .44$	
知識・解釈群	t検定	3.3(1.4)	2.1(1.1)	$\rho < .05$	-0.7	知識・解釈群	t検定	3.7(1.2)	3.1(1.2)	$\rho < .05$	-0.7
	交互作用			$\rho < .05$		知識・解釈群	交互作用			$\rho < .10$	
統制群	t検定	2.9(1.4)	2.7(1.2)	$\rho = .19$	-0.2	統制群	t検定	3.7(1.1)	3.5(1.3)	$\rho = .33$	-0.1

*()内はSD

不可解さの低減が確認された。ただし、不快さと不可解さについては統制群との比較では分散分析の交互作用が有意ではなかった。

解釈群については、フラストレーションの増加が見られたが、心地よさ、不快さ、不可解さについては有意な変化は確認できなかった。

知識・解釈群では、有意傾向ではあるが心地よさの増加が見られ、フラストレーション、不快さ、不可解さについては有意な低減が見られた。

統制群では全ての項目で事前から事後にかけての変化が見られなかった。

4. 考察

まず、知識の単独の効果を検討する。知識群では心地よさの増加が見られたことから、知識が肯定的な抽象画評価に寄与したことを示されたといえる。ただし、フラストレーションでは事前事後の差もなかったこと、また分散分析では、知識群の効果は後に述べる知識・解釈群に比較して限定的と考えられる。また、不快さや不可解さについては分散分析の結果が有意でなく、追試可能性の検討が必要である。

次に拡散的鑑賞単独の効果を検討する。解釈群ではフラストレーション以外の有意な効果は観察されず、拡散的解釈の抽象画評価への影響は限定的であった。

原因として、拡散的鑑賞には一定の知識が必要とするからであると考えられる。ただし、今回の介入の方法が不適切であった可能性には留意する必要がある。本実験では文章によって鑑賞方略を変えることを試みたが、ある程度の時間をかけて拡散的鑑賞方略を獲得させれば、結果が異なる可能性はある。

最後に知識と鑑賞方略の相互作用を検討する。知識・解釈群では全ての項目で有意な変化がみられた。知識群と解釈群にこのような変化はないことから、知識と拡散的鑑賞の両者が揃うことが肯定的な抽象画評価につながるという本研究の仮説が検証されたと言える。

ここまで、心地よさは肯定的、その他3項目は否定的な項目として位置づけて解釈してきたが、フラストレーション項目については、他の3項目とやや異なった位置づけが可能となる。知識群と解釈群を比較すると、知識群ではフラストレーション以外、解釈群ではフラストレーションのみに有意な違いが見られた。これは、フラストレーション項目の特殊性を示唆している。推察すると、フラストレーション以外の項目が絵画自体の評価であるのに対し、フラストレーションは鑑賞行為に対する評価であり、解釈群における鑑賞方略の影響が現れたのではないかと考えられる。

最後に本研究の問題を2点挙げる。

一つは、本実験では鑑賞終了後に評定に回答しても

らう、という手法を取ったため、鑑賞中の介入による変化プロセスが見落とされている点である。この点については、田中・松本^[4]の研究手続きのように、鑑賞中に参加者に発話を求め、その発話を分析することで補うことが可能かもしれない。

もう一つは参加者から解説文の内容が難しかった、という意見が聞かれたことである。解説文の内容が抽象的なものであったため、こうした感想があったのかもしれない。仮に今回の実験データにこの解説文の特徴が反映されているとするならば、より平易な文体の解説文を用いて知識の効果、および拡散的鑑賞方略との相互作用を測定する必要があるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15K00690 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] 杉野正, (1965) “芸術解釈の問題”, 竹内敏雄 (監修), 講座—美学新思潮 2 芸術の解釈, 美術出版社, pp. 9-40.
- [2] Schmidt, J. A., McLaughlin, J. P., & Ligheten, P., (1989) “Novice strategies for understanding paintings”, *Applied Cognitive psychology*, Vol.3, pp.65-72.
- [3] Barthes, R., (1968) “La mort de l'auteur” (花輪光 (訳), (1979) “物語の構造分析”, みすず書房)
- [4] 田中吉史・松本彩季, (2013) “絵画鑑賞における認知的制約とその緩和”, *認知科学*, Vol.20, pp.130-151.
- [5] アメリア・アレナス, (2001) 木下哲夫 (訳) *みる・かんがえる・はなす - 鑑賞教育へのヒント*, 淡交社